

## 教育講演 1

## フィンランドの教育—そのしくみと成果

横 澤 宏 一\*

[キーワード] 専門大学、評価尺度

## I. フィンランドの概要

フィンランドの面積は日本よりやや小さい約33.8万平方キロメートル、人口は北海道とほぼ等しい約550万人である。国土は北緯60°から70°にわたり、首都ヘルシンキはほぼ最南端に位置する。南側の海岸線は複雑に入り組んで多島海をなし、9万5,000とも言われる群島が散在する。一方、ラップランド(写真1)と言われる北方地域は北極圏であり、夏は白夜、冬は極夜となる。人口密度が低く、森林面積は国土の2/3、水域面積は1割を占める。森と湖の国(写真2)と言われるゆえんである。南と西がバルト海に面し、スウェーデン、ノル

ウェー、ロシアと陸上で国境を接する。特に東側のロシアとの国境は1,300キロメートルもの長さがある。

公用語はフィンランド語とスウェーデン語であり、公式の案内表示は必ずこの2つが併記される。ただし、現在のスウェーデン語話者は人口の5.4%に過ぎず、少数派である。フィンランド語はウラル語族の一つであるが、世界に類似の言語がほとんどないと言われ、類似言語は南の海を挟んだ対岸に位置するエストニア語くらいである。

古来、北欧の国家はスウェーデンとデンマークであり、フィンランドは長くスウェーデン領であった。1809年にロシアに割譲されたが、今から



写真1 ラップランドの冬の風景



写真2 森と湖(コリ国立公園)

\*北海道大学大学院保健科学研究院 yokosawa@med.hokudai.ac.jp

わずか100年前の1917年に独立してフィンランド共和国が成立した。その後、1939年、1941～44年の2度にわたってソビエト連邦と戦火を交え、国土の一部を失ったものの独立を維持し、第二次世界大戦終結(1945年)後の1955年には国際連合に加盟した。1995年には欧州連合(EU)に加盟、2002年にはユーロを導入した。その一方で1948年に軍事協定を含むフィンランド・ソ連友好協力相互援助条約(FCMA条約)を締結しており、北大西洋条約機構(NATO)には現在も加盟していない。1970年代には東欧、西欧双方と貿易協定を結び、1975年に欧州安全保障協力会議(CSCE)を開催するなど、東西両陣営のバランスの上に立った外交・経済政策を展開してきた。地勢的に東西の要の位置にあるゆえの現実的な政策と言える<sup>1)</sup>。

現在のフィンランドを特徴づけるものに、男女平等、汚職率の低さ、育児支援、生活保障などが挙げられる。世界経済フォーラムの2018年ジェンダー・ギャップ指数<sup>2)</sup>で149カ国中4位(日本は110位)、トランスペアレンシー・インターナショナルの2017年腐敗認識指数<sup>3)</sup>で180カ国中3位(日本は20位)と常に上位にある。育児支援としては出産後に国から無償で支給される育児用品セットが有名である。育児休暇取得後は元の職場への復帰が保証されている。また、生活保障として2017年からベーシックインカム制度が試験導入されている。

これらに加えて、フィンランドを特徴づけるのは質の高い教育システムである。第二次世界大戦の終結を敗戦国として迎えながら、技術立国、福祉大国として世界に知られるようになったフィンランドの活力の源泉の一つを、質の高い教育に求めることができる。

## II. 基礎教育

フィンランドは、経済開発協力機構(OECD)が15歳児を対象に3年ごとに実施する学習到達度調査(PISA: Programme for International Student Assessment)(表1)<sup>4)</sup>で2000年代初めに好成績を収めた。日本で小学校、中学校に相当するフィンランドの基礎教育は、この時期に世界の脚光を浴びた。

フィンランドでは公的教育費が充実<sup>5)6)</sup>しており、大学まですべて無償である。基礎教育のクラスあたりの人数は最多でも20人程度で、少数教育<sup>7)</sup>が徹底され、個人に合った学び方を身につけることができる。小学校教員資格は大学院に進学しなければ取得できず、合格率10%程度の最難関の職業であり、教員の給与水準や社会的地位が高い。

学校では暗記(知識)よりも自分の頭で考えられるようになる教育を施しており、自分で考えた多様な答えがあつてよく、失敗や誤りが重視される。科目横断型の授業もあり、一つのテーマ(例えば「水」)に様々な科目の観点から1週間取り組む、といった授業も実施されている。

小学校の教員はあらゆる授業を英語で実施できる。英語教育は小学校3年生から始まり、文法や発音の正確さよりコミュニケーションできることが重要である。小学生のうちに英語のプレゼンや質疑ができるようになる。

## III. 高等教育

日本で大学に相当する教育機関は大学(写真3)とポリテクニック(専門大学)である<sup>8)</sup>。大学の学部編成は日本とほぼ同じであり、医学部と獣医学部は大学に設置されている。ポリテクニックには

表1 OECD生徒の学習到達度調査における順位の推移<sup>4)</sup>

対象国数	数学的リテラシー		読解力		科学的リテラシー	
	フィンランド	日本	フィンランド	日本	フィンランド	日本
2000年	32	4	1	8	3	2
2003年	41	2	6	1	>10	1
2006年	56	2	10	2	>10	5
2015年	72	>10	5	4	8	5

8つの学問分野があり、50以上の資格職がここで養成される。日本では看護師、検査技師、作業療法士、臨床工学士、救命救急士、介護士などに相当する医療専門職の養成課程はポリテクニクに属する。大学とポリテクニクに上下関係はなく、学生の人気も同程度に高い。学問を修めたいか、専門家になりたいかの選択である。統合が進み、かつて20校あった大学が16校に、26校あったポリテクニクが18校になったが、今のところ大学とポリテクニクが統合されたことはない。大学院の授業は基本的にすべて英語であり、夏学期には国外を含む多くの大学と短期留学の学生(サマースチューデント)を交換している。

#### IV. 考 察

フィンランドでは、基礎教育に関しては、個性や思考能力を重視し、自分で考えることのできる独立した個人の育成が行われている。高等教育においては、比較的早い段階から学問を目指すのか、専門職を目指すのかが明確に分かれ(もちろん進路変更は可能である)、自分の個性や希望に合わせた効率的な教育が実施されている。医療専門職養成校に専門学校、短期大学、大学が併存する日本とは、基本的な考え方が異なるようである。

これらの教育システムは、当然ながらフィンランドの歴史や現在の状況と無縁ではない。例えばフィンランドでは英語教育が充実しており、ほとんどの人が学校教育だけで英語でコミュニケー

ションできるようになる。フィンランド人の英語能力の高さがグローバル社会の中での経済発展に大きく貢献したことは間違いない。しかし見方を変えれば、フィンランド語でコミュニケーションできる人口が世界でわずか550万人に限られているためでもある。フィンランド語人口が少ないために、英語のアニメーションを翻訳するコストが見合わず、英語のまま放映されていることや、英語に近いスウェーデン語に幼少期から接していることも英語能力が高い一因と思われる。つまり、フィンランドの英語能力は極めて現実的な要請に基づいていると考えることもできる。そう考えれば、男女平等や育児支援、育児休暇後の復職保証は少ない労働人口を補うためであり、質の高い教育は労働生産性を上げるための政策であるとも言える。高等教育においても専門職に求められるのは何よりも豊富な専門知識と高いパフォーマンスである。

フィンランドはサンタクロースやムーミンの故郷であり、美しい森と湖と古城(写真4)、白夜とオーロラ、洗練された北欧デザインなどでも知られ、おとぎの国のようなイメージがある。しかし、独立に至るまでは、長く大国スウェーデンやロシアの支配下であり、第二次世界大戦後も東西両陣営に挟まれながら独立を維持し、経済発展を遂げてきた。EUに加盟する西側諸国の一員でもあるが、エネルギー供給の7割はロシアに依存している。その外交政策の基本は東西のパワーバランス



写真3 ヘルシンキ大学



写真4 オラヴィ城

を見据えた透徹したリアリズムにあるとされる。基礎教育の段階から考える力を重視するのは、一人一人が自分の頭で真剣に考えなければ、国家を維持発展させることはできないという極めて現実的な判断によるのかもしれない。

OECD の学習到達度調査が始まった 2000 年代初頭は、フィンランドがそれまで実践してきた基礎教育のあり方に、ようやく評価尺度が追い付いた時代であった。近年の調査では、フィンランドは必ずしも上位に入っていない(表 1)。しかしフィンランドはおそらく、世界の評価尺度がまだ追い付いていない新しい価値を創造して、次の時代の教育を実践し始めているに違いない。

### おわりに

「フィンランドに生まれることは、宝くじ当たるほどの幸運」とまで言われる。世界的な企業を有し、教育水準、文化水準が高く、どこでも英語が通じる。治安もよく、親日的である。不思議なことに性格的に日本人と通じるものを感じるものがよくある。物価が高いのが難点であるが、共同研究先、学生の派遣留学先としてぜひお勧めしたい。

本稿は、教育講演の内容を要約して文書化したもので、論文というべき内容ではない。図表の転載許諾を取得しなかったため、データの詳細はホームページを参照いただきたい。私はフィンランドについても教育についても専門家ではないので、記述の誤りなどをご指摘いただければ幸いである。

講演にあたり、お話しを聞かせていただいたり、資料を提供いただいたりした以下の方々に感謝いたします。

Silja Ijas(シリア・イヤス)さん

(北海道大学現代日本学プログラム)

Armi Henriksson(アルミ・ヘンリクソン)さん

(東フィンランド大学)

Emmi Hiivola(エンミ・ヒーヴォラ)さん

(トゥルク大学)

高尾渉さん、伊藤慶彦さん

(北海道大学文学部地域システム科学講座)

水本秀明さん

(北海道フィンランド協会 北海道大学非常勤講師)

松岡宗太郎さん

(北海道開発局 元駐フィンランド日本国大使館一等書記官)

### 文献と註記

- 1) 石野裕子, 物語フィンランドの歴史, 中公新書; 2017.
- 2) [http://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2018.pdf](http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2018.pdf)
- 3) [https://www.transparency.org/news/feature/corruption\\_perceptions\\_index\\_2017](https://www.transparency.org/news/feature/corruption_perceptions_index_2017)
- 4) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/index01.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/index01.htm)
- 5) 2017 年の OECD 39 カ国の比較では、教育費対 GDP 比で 14 位(日本は 30 位)
- 6) 同, 教育費個人支出割合で低いほうから 1 位(日本は 38 位)
- 7) 同, 中学校のクラスあたりの生徒数で少ないほうから 9 位(日本は 37 位)
- 8) [https://www.oph.fi/download/151277\\_education\\_in\\_finland\\_japanese\\_2013.pdf](https://www.oph.fi/download/151277_education_in_finland_japanese_2013.pdf)
- 9) 写真はすべて筆者撮影